
とある二人の混沌掌握

そうる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある二人の混沌掌握

【Nコード】

N4907P

【作者名】

そつる

【あらすじ】

とあるの二次小説になります。はじめはレールガンから入りインデックスに入りたいと思います。二つともアニメ主軸でいきます。なお主人公は一応強いですが、しかし負ける時は負けます。

更新は不定期です。

また、ご都合主義入ってます、そして裏方が多いかも。

注意としては時系列に矛盾があります。

プロローグ（前書き）

作者にとって初投稿作品になります。分かりにくいかもしれません
がよろしく願います。

ブローグ

ここは、とある国にある秘密の地下軍事基地である。

その基地はとある野望のため、国家や人種を問わずさまざまな人間が集まり造られた。

もし核爆弾が基地の上空で爆発しても耐えられる堅固な構造で、地下30メートルの花崗岩でできた岩盤の中にあり、敷地面積は約1000平方メートル。

金属製のドアの厚さは、約40センチあり、停電時でも電力を供給できるという。

その基地の一部には研究機関がある。

この研究機関は独自に表には出せない兵器を開発したり、国際法で禁止された物を製造し保有している。

そしてある少年の開発を行っている。

その少年は幼い頃、人為的に脳を開発をしていないのに超能力を使った。

それを見た両親に捨てられそうになったところを、この研究機関に引き取られた。

その際、その少年は表向きには死んだ事になり、両親には保険料という名の多額の口止め料が支払われた。

少年が研究機関に連れてこられて行われたことは、能力を使った兵器運用である。

少年の能力は、詳細は不明だが大まかに判明していることは、闇を操ることである。

闇という抽象的な表現になるのは、見た目が真っ黒な液体の様な気体の様な形をして、解析しても何一つ詳しいことが分からないためである。

その闇に物を取り込むと、取り込んだ物を理解し操ることができる。

また取り込んだ物は闇の中に入れていれば、いつでも自由に闇の中から取り出すことができる。

そして自分自身の体も闇にすることができ、少年が死んだら自動で闇になり体が万全の状態で復活する。

この能力を使って、ありとあらゆる兵器を取り込んで運用し、また通常では潜入困難な場所も単独で潜入する、これを行えるように少年は開発された。

少年が兵器として運用されてしばらくたった時、少年はある少女と出会った。

少女は少年と同じように能力を持っていた、少女の能力は白い炎を使い何でも跡形もなく消し去る事ができる能力だった。

少年は少女と接するうちに、ここに来て初めて心が満たされていくのを感じていった。

少年は少女が来るまで感情が薄らいで無くなりかけていた、しかし少女によって少年の心は満たされ、人間らしい感情を手に入れた。

ある時、少年は知ってしまった。

少女が少年を繋ぎ止める為に連れて来させられ、もし少年が逆らい牙を剥く様なら、少女の能力を使い少年を消す事。

そしてその為に、少女に無理な開発を行ってる事を。

少女の能力は何でも跡形もなく消し去る事ができる、その能力を使いどんなことをやっても殺すことができない少年を殺す手段が、研究機関には用意しておく必要があった。

なぜそのような回りくどい手段を研究機関が選択したかというところ元々は洗脳するつもりだったのだが少年が闇の状態になったら洗脳が解けてしまうので、そのような手段を選択したのだ。

少年はその事実を知ったらすぐに行動を開始した。

少女を基地の中から秘密裏に探し出し、外の安全な所まで避難させる。少年は人間や兵器ごと基地を丸ごと闇に取り込んだ。

取り込んだ後には何も残らなかった、文字通りそこにはただ大地に空いた巨大な穴があるだけだった。

少年と少女はその後、自分たちを狙う組織から身を隠しながら各地を転々とした。

そして少年が少女の安全のために、学園都市に行くことを決めた。学園都市の中にいれば、学園都市の外の組織は簡単には襲えなくなるからだ。

その際、自分達が学園都市に入るのにいくつか条件が出されたが、少年はそれを了承した。

そして学園都市での二人の物語が始まる。

オリジナルキャラ紹介

キャラクター紹介

名前 くうつげき 空隙 ばんしょう 磐生

性別 男

年齢 16歳

身長 170cm

能力名 カオスオーナー 混沌掌握

能力詳細

原石に分類される、その力としては、
自分の体を闇の塊にする、またその闇を使い生物、無生物を問わず
ありとあらゆるものを、
自分の闇に取り込む事ができる。

性格

どちらかというと暗い性格、無口で傍観者のよう、また自分の為

なら他人を利用したり、必要なら命を奪ったりする。

そして月乃の為ならなんでもやる、月乃に危害を加える者は何であろつと排除・殺害する。

能力や武器使用

闇を使う O K

日用品、O K

警棒程度 O K

銃など法律に引っかかる物 ダメ ただし、必要があれば使う

容姿

黒髪黒眼で見た目は普通という印象

名前 白咲しろさき 月乃つきの

性別 女

年齢 16歳

身長 165cm

能力名 ホワイトデリート
白炎消去

能力詳細

原石に分類される、その力としては、
白炎を使い何でも跡形もなく消し去る事が出来る。
しかし、自分が触れていないと炎が出せず
さらに能力を使い過ぎると、意識を失い倒れる。

能力使用

普段は能力は一切使わない。
しかし人を助ける時などは躊躇なく能力を使う。

容姿

髪は白髪で腰の下まであり眼は紅眼、肌も真っ白で
見た目は上の上。

第一話

学園都市

そこは日本の東京西部に位置し、東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市。

総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人（その8割は学生）。

最先端の科学技術が研究・運用されており、都市の内外では数十年以上の技術格差が存在する。

都市はそれぞれ特色のある23の学区から構成されている。

建前では日本の一都市であるが、実際には統括理事長および統括理事会が行政・立法・司法の全てを独自に運営し、その実態は独立国家に相当する。例えば独自の軍勢力（建前は自衛兵器）を有していたり、都市の上層部が各国の外交官と会うなど独自の外交なども行っている。

都市の周囲は高さ5m・厚さ3mの壁に囲まれ、外部から隔離されている。

都市への出入りは厳重な審査があり、都市内も人工衛星や監視カメラなどによって監視されている。

治安は、志願学生から選抜される風紀委員と教員有志による警備員ジャッチメントによって守られている。アンチスキル

その学園都市に最近来た空際 磐生、白咲 月乃により物語は始まる。

空隙と白咲は学園都市から二人の奨学金と補助金が振り込まれたので、それを下ろしに第七学区の銀行の前まで来ていた。

「なんで昼間なのに、この銀行はシャッターが下りているんだ？」

「さあ、分かりません……」

平日の昼にもかかわらず、二人が来た銀行はシャッターが閉まり出入りができない状態だった。

二人の隣にあるシャッターの前に、花の髪飾りをつけた小学生位の少女が空間移動で、いきなり現れシャッターを叩きながら目に涙を浮かべながら言った。

「外……白井さん中に居るんですか、どうして私だけ……白井さんも早く外へ、白井さん」

二人は知る由も無いがその少女は初春ついはる 飾利かざりである。

白咲は近くに現れた初春の様子を見ると、初春に近ずき膝を折り初春よりも視線を下にして、落ち着いた口調で話しかけた。

「どうしたの、何があったの？」

「お願いします助けてください、中に強盗が風紀委員が強盗に襲われてて、助けてくださいお願いします」

初春は白咲にすりつく様にして助けを求めた。

「分かったわ」

白咲は初春の話を聞くと一言そう言って頷くと、立ち上がりシャッターに右手を伸ばし手の平でシャッターに触れて自分の能力を使

おうとした。

「月乃、自分がやるよ」

今まで白咲の後ろで事の成り行きを見ていた空隙が、白咲を手で制して自分がシャッターの前に立った。

空隙は初春の為に人助けをしようというのではない、白咲の為に動くのだ。

このまま空隙が何もしないと、白咲が能力を使っても助けようとする、銀行強盗程度が白咲にかなうはずもないが、空隙にとって問題なのはそこではない、白咲が能力を使うところだ、白咲は能力を使い過ぎると意識を失い倒れてしまい最悪、昏睡状態になってしまう。

そんなことは空隙が許容することはできない、だから白咲に能力を使わせないため自分が動くのだ。

空隙は能力を使い自分の体を闇にして、前にあるシャッターを侵食するようにして通り抜け銀行の中に入った。

空隙が元の体に戻り、銀行の中を見ると傷ついて座り込んでいる少女と銀行強盗らしき男が居た。傷ついている少女は白井黒子、初春が助けて欲しいと思っている少女である。

その他にも、背中に何かの破片が刺さって気絶している女性や気絶している男がいたが、空隙は助けようとも声をかけたりもしない。

「能力者、風紀委員か!？」

「（どうやらあの男が銀行強盗で間違いないみたいだな……よしやるか）」

空隙は銀行強盗犯を確認すると、街を歩く様に自然に相手に近ず

いて行った。

「クソっ！」

銀行強盗は手のひらに複数個納まるサイズの鉄球を、8個同時に投げてきた。

普通ならそのまま地面に落ちるであろう鉄球は、同じ速度で空隙に向かつて進み続けた。

これがこの男の能力、イコールスピード絶対等速である。

その能力は投げた物体が、能力を解除するか投げた物が壊れるまで、前に何があると同じ速度で進み続ける能力である。

ただしこの能力は威力はあっても速度は遅い、それは男も分かっている。

だから初めにこの能力を使い、相手が鉄球を避けたところをナイフで刺すつもりだった。

しかし空隙は男の予想に反して、そのまま真つすぐ歩き続けた。

そして鉄球が空隙に当たると思われた瞬間、空隙が能力を使い自分の体を銀行に侵入した時と、

同じ様に闇にして、鉄球を闇に取り込んだ。

空隙はそのまま銀行強盗に近ずき、相手が呆気にとられて無防備な所を腹を殴り気絶させ、銀行強盗が気絶する際に落としたナイフを遠くに蹴り飛ばした。

「（これでいいな……さて戻るか）」

空隙は侵入した時と同じようにして、シャッターを通り抜け白咲の元に戻ろうとした。

「待って下さいですよ！」

白井が空隙を呼び止めようとしたが、空隙はそのままシャッターを通り抜けた。

「終わったよ、行こうか」

「はい」

空隙と白咲はそう短く言葉を交わすと、二人揃って歩き出した。

第二話

銀行強盗を倒した次の日、空隙と白咲は警備員に呼び出されていた。

それというのも、空隙が銀行強盗を倒してすぐにその場から立ち去ったのが原因である。

そのまま待っていれば、銀行に警備員が到着して簡単な事情聴取で終わりになるはずなのだが、二人が立ち去って事情聴取ができなかったので呼び出されたのだ。

なぜ空隙と白咲が特定されたのかといえば、銀行にあった防犯カメラからデータを解析して書庫に載っている能力者情報と照らし合わせた結果、空隙がヒットしたのだ。

白咲の方は初春の証言からである。

そして今、形だけの事情聴取が終わろうとしていた。

「つまり君達は銀行から風紀委員によって逃がされた、風紀委員志願生の少女から事情を聞いて銀行に侵入し銀行強盗を倒したと、こういうことでいいのかな？」

「はい、そうです」

「分かった、もういいよありがとう、これで事情聴取は終わりだよ。ああ、そういえば君達に会いたがっている女の子達がいるんだが」

「女の子達？誰です」

「まあ、会ってみれば分かるよ、ついて来てくれ」

二人は今までいた部屋を出て休憩室に案内された。

そこには初春と白井が入口に近い椅子に座っていた。

「君達に会いたいと言っているのはこの子達だよ、それじゃあ私はもう行くよ、後は君達の自由にしてくれていいよ」

警備員の男性はそれだけ言うと、休憩室を出て行った。

とりあえず空隙と白咲は初春と白井の前の椅子に座った。

「あの……あの時は本当にありがとうございましたの」

「はい、本当にありがとうございます」

白井と初春はそれぞれお礼を言った。

「いえ、見過ごせなかったものですから。それに私は何もしてません、警生がやってくれましたから、お礼なら警生に言ってあげて下さい」

白咲は笑顔をうかべながら言った。

「いや、自分は月乃のためにやっただけだから、それにあの程度の事件は自分が動かなくても警備員が来れば解決できる事件だから、お礼ならいいよ」

空隙は端的に言った。

「はあ、そうですね」

「そうだよ。（そろそろ時間だな……）月乃そろそろ時間だから行くのか」

空隙は闇の中の時計の時間を確認すると、立ち上がりながら白咲に言った。

「もうそんな時間ですか、すみません私達これから行かないといけない所があるので、これで失礼します。すみません、わざわざ会いに来てくれたのに……」

「いえそんな、私達はお礼が言えただけで十分です」

「そうですね、それに予定があるならしかたありませんの」

「そうですね、それでは失礼します」

「それじゃあ」

空隙と白咲は初春と白井に別れのあいさつを言って別れた。

空隙と白咲は第七学区の病院にいる、カエル顔の医者にある事を対処可能か結果を聞きに行った。

「それじゃあ結果だけ言うとお処可能だね？」

「本当ですか！よかった。……それでその対処法はどのようになり

ますか？」

空隙はカエル顔の医者の結果聞くと白咲以上に笑顔で喜んだ。

「うん、これを首に付けてもらっただけでいいよ？」

カエル顔の医者は白いチョーカーを取り出した。

「前の検査結果から君の力を常人と同じ30%に抑える装置だね？」

白咲は取り出されたチョーカーを自分の首に付けた。

そして自分の手を今出せる最大の力で握った。

「どうだい月乃？」

「はい、どうやっても普通までしか力が出せません」

「本当に成功みたいだね」

「当たり前だね、誰が作ったと思ってるんだい？」

「先生、本当にありがとうございます」

「自分からお礼を言います、ありがとうございます」

空隙と白咲は二人とも深く頭を下げてお礼を言った。

二人はその後、詳しい説明を受けたら完全下校時間がせまってきたので、自分たちのマンションに帰った。

第二話（後書き）

更新は遅くても1ヶ月以内にはします。

なお作者はモンハン廃人でゲソ

なのでいまはなかなか更新できないでゲソ

第三話（前書き）

できたので上げます。

第三話

季節は夏、学生はそろそろ夏休みに入る時期である。

白咲は用事がある空隙を待っていた。

二人は空隙の用事が済んだら銀行でお金を下ろして、その後二人で遊ぶ約束をしていた。

白咲は銀行の中ではなく、銀行前の道路を挟んで向かい側の広場で空隙を待っていた。

ただ待っているだけでもいいのだが、白咲は小腹が空いてきたので広場で売っていたクレープを買うことにした。

クレープ屋は、来年度入都市希望者用学園都市見学会の親子の団体が、ここで休憩していたので混んでいた。

白咲は列に並んでいたら、後ろに並んだ人の話し声が聞こえてきた。

「タイミングが悪かったみたいですわね」

「先にベンチを確保してまいりますわ」

「あつ、じゃあ私も。佐天さん私達の分お願いしますね」

「お金は後でお支払いしますわ」

「えっちょっあつ」

「えっなに？」

「いえ、あの順番変わります？」

「あつ、別に順番なんて。私はクレープさえ買えればそれでいい」

「はあ」

白咲は話し声を内心少し笑いながら聞いていた。

それは女の子の一人がストラップが欲しいのに、欲しくないとやっているからである。

そうこうしているうちに列は進み白咲の番になった。

「お待たせしました、はいどうぞ最後の一個ですよ」

「最後の一個ですか……」

注文して出来立てのクレープを受け取ると、店員に子供向けに見た目が可愛くなっているカエルのマスコット、通称ゲコ太を受け取った。

白咲は後ろを見ると、さっき話していた女の子の一人が地面に打ちひしがれていた。

「まさかここまで落ち込むとは……よし」

「あの、もしよかったらこれ差し上げます」

白咲は地面に打ちひしがれている女の子の近づき、ゲコ太を差し出して言った。

「いいんですか！ ホントにいいんですか！」

「はい」

「ありがとうー！」

女の子は白咲の手を両手で握り感謝の言葉を言った。

白咲はその後、クレープを食べていたら銀行の前にいた空隙と目があったので、銀行に行こうとしたら銀行の防犯シャツターが爆発した。

その爆発に空隙も巻き込まれた。

空隙サイド

「痛いな……」

空隙は爆発の衝撃と、爆風で吹き飛んだ銀行の防犯シャツターにより、アスファルトの地面に叩きつけられたのだ。

「（とりあえず闇になって体を元に戻すか）」

そうして闇になったら、服がボロボロになっていることに気がついたので、闇の中から服を出してボロボロの服と交換した。

そして闇から元の体になり黒煙の中から出た。

「よかった！ 無事だったんですね！ あれ、あなたはあの時の」
黒煙から出たら頭に花が咲いている様な女の子にそう言われた。
その女の子は初春 飾利、空隙と面識がある女の子である。

空隙は初春を無視して横を通りすぎ、広場にいる白咲の元に向かった。

「大丈夫、月乃？」

「はい、私は大丈夫です。どうやら、ただの銀行強盗のようですよ」「そうみたいだね」

広場に着いて空隙と白咲は、銀行の中から三人の男達が出てくるのを見ながら、そう会話した。

男達の逃げている先に、常盤台中学の制服を着たツインテールの女の子が、立ちはだかった。

その女の子は白井 黒子、こちらも空隙と面識がある女の子である。男達の一人は白井をあなどっているのか、白井にかかって行ったら、合気道の様な要領で地面に叩きつけられ気を失った。

もう二人目の男は発火能力のようで、炎を出して白井を攻撃した、しかし白井は空間移動テレポートを使い男の前に移動し、さらに頭上に移動してドロップキックをかました、そうして倒れた男の服に鉄矢をテレポートで打ち込み拘束した。

「うーむ、手慣れているな」

空隙は白井の手際を見て、そう素直に言葉をもらした。

「さて、いい物も見れたしそろそろ開いている銀行に行こうか」

空隙がそう白咲に言って歩き出そうとしたら、二人の視界にさっきの男達の一人が、男の子を連れ去ろうとしている物が見えた。

そしてそこに、長い黒髪の女の子が男の子の助けに入った。

その女の子は佐天 涙子さてん なるこである。

男はそれが気に食わなかったのか、助けに入った佐天を足で蹴り飛ばした。

そしてその男は車に乗って急発進で走らせ、ウターンして戻ってきた。

「大丈夫でしょうか？」

「うーむ、大丈夫じゃない」

ウターンして戻ってくる車の先には、常盤台中学の制服を着た茶

色のショートヘアの女の子がいる。

その女の子は御坂^{みさか} 美琴^{みこと}である。

「（普通に行けばあのまま轢かれて死ぬけれども、なんか違う感じだな。あの女の子は自分で車の前に立った、今も迫ってくる車に全く恐怖を感じていない、そしてさっきの常盤台中学の制服を着たツインテールの女の子が助けに入らない、）」

空隙がそんなことを考えていると、御坂がスカートのポケットからコインを出し、そしてコインをレーザーのように発射した。

男が乗った車はそれを食らい空中に回転しながら吹っ飛び、御坂を越えて地面と激突した。

「今のはもしかしてレールガンか？」

空隙は闇の中にある能力者データを見て判断した。

「（だとしたらあの子が八人のレベル5の第三位、超電磁砲^{レールガン}か、なるほど助けがいないわけだ）」

「さて、いい加減そろそろ銀行に行こうか」

「はい、事件も終わりのようですし」

二人は広場を後にした。

第三話（後書き）

なんか何もしないな・・・とゆーか佐天さん助けるよ！

第四話

ここは、学園都市にある混沌掌握カオスオーナーを研究している研究機関の休憩室である。ここで二人の研究員が話し合っていた。

「混沌掌握の能力はどのような原理が全く分からない？」

「そうだ、解析不能だ」

「うすうすは感じていましたが、一応理由を聞いても？」

「構わんよ、後になつたら他の者にも発表する予定だ」

「では、何故ですか？」

「君も知つての通り原石の能力は能力開発を受けた者が発現する能力とは方向性の違う能力が多い、混沌掌握も全く方向性の違う能力だ。未だに原石については謎が多い、削板そぎいた軍覇ぐんぱの能力も原理が全く分からない一人だ。そして混沌掌握の能力は闇を使う、という所までは良いでしょう。だが問題はその先だ、混沌掌握は頭……いや脳をグチャグチャにされても能力を使い復活することができる」

「………ありえるのですか脳がグチャグチャの状態では能力はおるか、生きるのだって難しい…普通はそのまま死にます」

「普通でないのが超能力だとしても混沌掌握はハッキリ言って異常だよ」

「私も同感です、混沌掌握の能力測定を少しばかり見ましたが、奴は闇にこの研究所では収まりきらない量の物を入れていました、さらに生物まで入れていました、それも生きた状態で」

「ああ、さらにそれらを傷つけたり完全に壊しても、混沌掌握が闇に取り込んでまた出すだけで完全に元に戻る、生物で試しても同じだった」

「そこで謎なのが、混沌掌握の使う闇とは何なのか？ということだ」

「たしか、解析不能でしたか」

「前の研究機関では最終的にその結論になった」

「前の研究機関が出した結論を鵜呑みにはできませんが、多分ここ

でも同じ結果がでたのですか？」

「そう、解析不能だ」

「まるでB級ホラーのようですね」

「ここまでくるとそうも言いたくなる、…とまあこんなことで原理不明なんだ」

「なるほど、たしかに説明のできない事ばかりですからね」

「ああ、そのためかは知らんがあまり無理な開発はするなどの、上からのお達しが来ている」

「上も削板そぎいた軍霸ぐんぱと同じように、分からないなら開発はするなということですか？」

「多分、そういうことだろうな、無理に開発を進めて死んでしまつては元も子もないからな」

「それもそうですね、まあ混沌掌握が死ぬなんて考えにくいですがね」

「そうだな私も同感だ、……そろそろ時間だ行こう」

「分かりました」

第四話（後書き）

休みに入ったので、なるべく投稿したいと思います。
次話は一週間以内に出します。

第五話

空隙はいつも通り研究所に行ったら、空隙のこれからについて、説明を受けた。

結論から言うと、ほとんど研究機関に来なくてもよく。普段の行動も自由、ただし闇の中にある危険な物は使うな、というものだった。

空隙は時間ができた為、街を散策していた。

そして歩いているうちに薄暗い路地裏に入ってしまった。

「ここはどこだ？ やっぱり、学区をまたいだのが悪かったか？

近場にしておけばよかった……はあ、どうするか」

空隙はそう悩んでいると、遠くから銃声が聞こえた。

「………行ってみるか」

空隙は銃声の聞こえた方に歩いて行った。

そこはひらけた場所で駐車場だった所ようだ。その駐車場の奥に、一人の人間がいた。

その人間は空隙に気づいた様でこう言った。

「ああ、なんだよ手前、一般人がなんでこんな所にいるんだよ」

その人間は少年だったようで、短髪は白く、肌も白く、しかし瞳だけは爛々と紅く真黒い服を着ていた。

「いや、銃声が聞こえたから」

空隙は素直にそう答えた。

「はっ！ 興味本位で首を突っ込みましたってか」

「まあ、そんなところ……所でさっきから気になっていたんだけど、

君の後ろにあるそれは死体かい？」

少年の影と辺りが薄暗いせいで詳しくは見えないが、空隙は経験からそう判断した。

「あはぎやはっ！ 大正解そうこれは死体だよ」

「ふーん……それ、もしかして御坂 美琴かい？」

空隙がこの前見た御坂 美琴と死体は瓜二つだった。

「いい線はいってるんだが、違うんだなーこれが、こいつは御坂美琴のクローンだ」

「御坂 美琴のクローン……」

「ところでよう、手前こんなもん見て無事で帰れるとおもってねえよなあ」

「やっぱり……自分を殺すのかい？」

「そのとうり、死人に口なしってなあ！」

少年は少し地面を蹴っただけでもの凄い速さで近ずいてきて、空隙に触れた。

その瞬間、空隙の体が弾け、そして死んだ。

「きやははははは！。ン、あア、なんだこりゃ」

空隙の死んだ体が闇になり、また体の形を取り戻し復活した空隙を見て少年はそう言った。

「く、は、面白エ。何なんだよその体は！」

空隙はそんな相手の言動など無視して、応戦した。

一気に後ろに下がると闇を自分の前にだし闇の中から、

アサルトライフルを10挺取り出しフルオートにして相手に向けて発砲した。

「パパパバツンー！！」

でもなぜか相手は一切傷つかず逆にアサルトライフルが全部破壊していた。

次に闇のドームで相手を閉じ込めると、手榴弾を20個を内部に出し爆破させた。

闇と爆風が辺りに飛び散る、しかしその中心の相手はまた無傷だった

た。

次に闇を半円状に相手の周りに伸ばすと、その闇から火炎放射機を10挺出して相手を燃やした。

火炎放射機の炎が全く効いていないと言っばかりに、相手は炎の中を歩いてきた。

次に闇で相手を完全に密封して、フルオロスルホン酸（超酸、一般に入手できる酸の中では最も強いものの1つ）で闇の中を満たした。

そうしたら、闇が爆発してフルオロスルホン酸が溢れ出した。

フルオロスルホン酸を回収したら、相手が見えたがまた無事らしい。次に闇の密度を濃くして戦車の砲塔部分まで出して、主砲を相手に向け

砲弾を徹甲弾（AP）の中でも細長い弾芯を持ち貫通力を高めたAPFSDS（装弾筒付翼安定徹甲弾）を装填して発射した。

そうしたら、こっちの戦車の方が壊れた。

「（今のは能力者でも防ぐのは難しいんだけど、なんで無事なんだ？）」

「手前一体何モンだ、色々武器出しやがって」

「……………自分は空隙 譬生、レベル5の混沌掌握。そう言う君は？」

「ヘエー、お前が新しいレベル5か、俺は一方通行だ」
アクセラレーター

「君が……………（レベル5の第一位）。道理で攻撃が効かない訳だ、全部反射していたんだ」

「じゃあどおする、このまま死ぬか？」

「（うーむ、どおするか戦術核ミサイルを撃つか……………いやダメだ反射される。毒ガス、ウイルスもダメっぽいし、闇にも取り込めないし弱ったなあ、自分は死にもしないし、勝てもしないどうするか）」
「そこまです、戦闘を中止してください、と、ミサカは警告します」

そんな声が聞こえると、御坂が10数人出てきた。
「チッ、もう来ちゃったのか」

「（御坂？ いやこれはクローンか）」

「もう一度言います戦闘を中止してください、二人がそのまま戦闘すると学園都市に甚大な被害をもたらします、と、ミサカはもう一度警告します」

「ということは、このまま戦闘をやめて家に帰っていいのかな？ もちろんこのことは誰にも喋らない」

「はい、構いません、と、ミサカはOKをだします」

「それじゃあ、さようなら」

空際は闇になり陰に紛れてその場から消えた。

第五話（後書き）

アクセラさんと主人公を戦わせてみたが、うちの主人公じゃあ倒せないようです。

第六話（前書き）

なんか長くなってしまった・・・

第六話

「なるほど、絶対能力進化（レベル6シフト）か」

「絶対能力（レベル6）ですか」

空隙は一方通行との戦闘後、御坂のクローンの事が気になって能力全開（取り込みであるスーパーコンピュータでハッキング）で調べた結果、絶対能力進化がヒットした。

「しかし、よく考えつくものだ」

「流石は学園都市といったところですね」

その実験の内容が最強の超能力者一方通行を絶対能力者（レベル6）へ進化させる実験。

天井亜雄、芳川桔梗、布束砥信といった一線級の研究者が参加している。

実験内容は、

「20000通りの戦闘環境で量産能力者を20000回殺害する」

というものだった。

量産能力者と言うクローンは御坂美琴の体細胞クローンで、妹達シスターズと言い、御坂は病気の治療の為に自分のDNAマップを提供したらしい。

まあ、その病気の治療の為にというのも怪しいな、最初から「超能力者の量産は可能か」という命題に基づき始まったようだし、それによって『量産能力者計画』レイオノイズにて開発された。

量産されたクローンはオリジナルと同じ能力開発を行われたが大元の1%程度の力しか出せず、実験は失敗。そのまま処分される所を絶対能力進化のターゲットとして拾われる。だそうだ。

「まあ、ある意味幸運だったかな、この実験を見て生きて帰れたんだから」

「幸運といえば幸運ですが……その考えはどうかと思いますよ」

「（普通はそのまま秘密を守るために、目撃者は始末されるから幸運だと思うけど、まあいいや）」

「さて、気になる事が分かったし、今日は二人で出かけますか」

「そうですね」

そうして空隙と白咲は家を出た。

空隙と白咲は街を回っていると、お腹が空いたので近くにあったファミリーレストランに入った。

空隙がお店に入って店内を見回すと、頭に花が咲いている様な女の子と目があった。

「あっ！ あなたはあの時の」

その少女は少し驚いた様子でそう言った。

「……………あの銀行の時の」

空隙は先日の銀行の件について思い出していた。

「大分前にも会っていますよ」

白咲が補足した。

「初春知り合い？」

少女の隣に座っている、長い黒髪の女の子がそう言った。

「数日前の銀行強盗の時の消えた謎の被害者ですよ、佐天さん」

「へー、この人が」

「やはりあなたでしたの」

常盤台中学の制服を着たツインテールの女の子が観察するような目で見てきた。

「お客様、あのよろしければ合席にしますか？」

お店の定員さんがそう尋ねてきた。

「ええと、月乃どおしy」合席でお願いしますの」

常盤台中学の制服を着たツインテールの女の子がそう横から言った。

「ああと、いいの合席で？」

空隙は聞き返した。

「はい、いいですよ、聞きたいことがありますので」

「そう、それじゃあ、いいかい月乃」

「はい」

空隙と白咲はそう言うと言った。

「それでは、自己紹介をしますの、私は常盤台中学ときわだいちゅうがくの白井しらい黒子くろこですの」

常盤台中学の制服を着たツインテールの女の子はそう言った。

「それじゃあ次はあたしね、あたしは常盤台中学の御坂みさか美琴みことよ」

常盤台中学の制服を着た茶色のショートヘアの女の子がそう言った。

「私は柵川中学校さくがわちゅうがくの初春ういはる飾利かざりです」

頭に花が咲いている様な女の子がそう言った。

「最後は私ね、私は柵川中学校の佐天さてん涙子なみこだよ」

長い黒髪の女の子はそう言った。

「自分は空隙くうげき磐生ばんしょう、学校は一応、長点上機学園ながてんじょうきがくえんに所属しているよ」

「私は白咲しろさき月乃つきの、学校は同じく長点上機学園に所属しています」

4人の自己紹介を聞くと空隙と白咲が自己紹介をした。

「長点上機学園……意外とすごい所に行っているんですね」

白井は驚いた様子でそう言った。

「そうでもないよ、自分と月乃は書類上在籍しているだけだし。あ、でも十分な学力と能力があるからただだね」

「長点上機学園に行かなくていい十分な学力と能力でいい？」

佐天がそう疑問に思ったらしい。

「それは、自分達が長点上機学園が用意したテストをほぼ満点でクリアしたからで、能力はレベル5とレベル4だからだよ」

空隙が疑問にそう答えた。

「……ヘーレベル5……レベル5……！！！！！！」
4人が声をそろえて叫んだ。

「あんたレベル5だったの!？」

御坂がそう言ってきた。

「そつだよ、第八位 カオスオーナー 混沌掌握」

「あんたが、新しいレベル5……」

御坂が自分の事をジーと見てきた。

「空隙さんがレベル5なら、聞いたかった件も納得ですね」

白井がそう呟いた。

「それって、爆発に巻き込まれて何故か無事だった件ですよね？」

佐天が思い出したようにそう言った。

「そうです、あの時は気づきませんでしたけど、後々考えてみると不思議でした」

初春がそう疑問を言った。

「爆発をくらった時はたしかに無事じゃなかったけど、能力を使っ
て直したから」

空隙はその時の事を思い出しながら言った。

「ふーん能力で。ところであんたの能力って一体何なの？」

御坂が聞いてきた。

「（書庫バンクに載っている事ならいいかな……）自分の能力は闇を操る
ことだよ」

「ちよつとあんた、私と戦いなさい！」

空隙の能力を聞いたとき御坂の目がキラッと光り、そう言ってきた。

「ちよつとお姉さま、またそんな腕試しだなんて」

白井が御坂に対してそんな事を言った。

「いいじゃない黒子、同じレベル5同士なんだし」

御坂は訳の分からない事を言った。

「レベル5同士の戦いですかー、見てみたいなー」

「ホントですね、私も見てみたいです」

佐天と初春が楽しそうにそう言った。そうすると白井が諦めたようにこう言った

「もう、しょうがないですわね。ただしお姉さまと戦いたいなら一つ条件がありますの、わたくしと戦っていただきますの」

「まあ、いいわ戦えるなら、それじゃあ移動しよっか、どこか戦ってもいい場所に」

御坂がそう言うつと移動を始めた。

そうして空隙はなぜか御坂と白井、二人と戦う事になった。

移動しているときに、随分前の銀行強盗の時の話をしたり、御坂がゲコ太のマスコットのお礼を改めて白咲にしたりした。

空隙と白咲を含めた6人は、河原に移動した。

「ここなら周りに迷惑掛らないでしょ」

御坂が辺りを見回しながらそう言った。

「はい、そうですわねお姉さま、それでは、いきますわよ空隙さん」
白井が空隙の方を向きながら言ってきた。

「（まあ、空間移動テレポーターとの戦闘に慣れておいてもいいかな。）分かった」

空隙がそう言うつと白井が空間移動テレポートで消えた。

次の瞬間、空隙が背中に触られたと感じたら、地面に寝ていた。

白井が太もものホルダーに仕込んだ金属矢を、空間移動で飛ばし空隙の服に打ちつけ動けなくした。

白井は空隙がアッサリ倒せたのが不思議なのか顔に？マークを浮かべていた。

「ええと、空隙さんあなた戦う気がないんですの」

「まあ、そう言えばそうかな？」

空隙は今、空間移動能力者の戦闘方法を観察しているので反撃をする気はない。

「それはつまり、私を馬鹿にしているんですの」

白井が何か誤解しているようだ。

「自分は白井を馬鹿にはしてないよ、ただ空間移動能力者の戦闘方法を観察しているだけだよ」

「戦闘の最中に随分余裕ですわね」

白井は怒りと苛立ちのこもった声で言った。

「あなたがそのつもりなら、空間移動の恐ろしさを見せてあげますわ」

白井はそう言うのと金属矢を空間移動で空隙の体に飛ばした。

「仮にもレベル5、これくらいで死にはしな」
「確かにこれくらいで死にはしない。」
えっ！　なんで平気なんですの！？」

白井は空隙が平気な様子に驚いたらしい。

「金属矢を取り込んだ。だから平気なんだ」

空隙は見た目はそのままに体の中の金属矢がある部分だけ闇にして取り込んだのだ。

「取り込んだって……一体どうやってですの！？」

「（白井は自分の能力を詳しく知らないから仕方ないか。）自分の能力で闇に取り込んだ」

「あなたの能力？　闇を使うとおっしゃていましたが、厄介な能力のようですね」

「（白井の言う事は多分合っているな。）ええと、多分白井の言うとおり厄介な能力だと思う」

今の白井に空隙は倒せなさそうだ。

「黒子ー！　私と相手交代よ」

御坂が黒子にそう言った。

「……今回は仕方ないですわね」

白井は素直に引いて、代わりに御坂が出てきた。

「やっとあんたと戦えるわね、同じレベル5同士遠慮はいらないわよね」

御坂は待ちわびたとばかりに、言ってきた。

「遠慮なんていらないよ。（遠慮なんてあつたら戦闘方法を観察してもほとんど意味がないからな）」

「そう、それじゃあいくわよ！」

御坂は電撃の槍を放ってきた、空隙に直撃すると空隙は死んだ。闇になり体の形をとると、電撃の槍を再度放ってきた。空隙はそれを闇を使い取り込んだ。

御坂が数回電撃の槍を打ってきたが、同じように取り込んだ。

「効かないみたいね、なら！」

御坂が地面に電気を通したら黒い砂の様な物が出てきて、それが剣の形をとった。

「（…………砂鉄か？）」

「砂鉄が振動してチェンソーみたいになってるから、これはどう！」

御坂はそう言うと、空隙に走って接近してきて胴体を切断した。

空隙は闇を集めて体の形をとろうとするが、体の形をとる前に御坂の砂鉄剣に切断されて体の形がとれなかった。

数回同じように繰り返しても、砂鉄で切断されて復活できなかった。

「（しょうがない）」

空隙は地面を浸食するように闇を辺り一面に広げた。

そうして自分のダミーを十体出現させた。

「そんなこともできるのね、それなら！」

御坂は砂鉄を鞭状にして空隙のダミーを次々切り刻んだ。

空隙はその隙に、少し離れた所で闇を回収しながら体を復活させた。

「あんたはどうやって倒せるのよ？」

御坂はうんざりした様子で尋ねてきた。

「さあ、自分でも分からない。（逆にこれくらいで本当に死んだらここに自分はいないからな…………）」

「分からないって…………まあいいわ、これに全ての力を込めてレールガンを撃つ」

御坂はコインを取り出してそう言った。

そしてコインをレーザーのように撃ってきた。

空隙の体は細切れ状になって飛び散った。

「さすがにこれは効いたわよね」

御坂はそう言ったようだ。

空隙は一か所に闇を集めて体を元に戻した。

「あんたの能力、一体どうなってるのよ……」

「分からない」

「また分からないって、まあいいわ、私の負けね」

御坂はそう言うとう肩を落とした。

「お姉さま、黒子が癒して差し上げますわ!」

白井が空間移動で御坂に抱きついた。

「御坂さん、空隙さん」

初春と佐天が走って来た。

「二人ともすごかったです!」

「はい、もうそれはかつこよかったです!」

佐天と初春が感想を言ってきた。

「ありがとう、初春さん佐天さん。黒子いい加減に離れなさい!」

白井を手で制しながら、御坂が答えた。

その後、完全下校時間に時間がせまってきたので解散となった。

その時御坂が再戦を言ってきたり四人とケータイのメアドを交換もした。

「まあ、それはいいかもしれないけど……御坂には実験の事は言わない方がいいかな?」

アクセラレータ

空隙と白咲は御坂のクローンが一方通行の実験に使われて、2000体死ぬのを知っているが、それを御坂に言ったらあいつは十中八九、実験を止めに行く。

その場合、御坂は死ぬな。

「難しい問題ですね……」

「やっぱり、言わない方がいいな……」
空隙と白咲はそういう結論に至った。

第六話（後書き）

主人公達のテストでほぼ満点をとった、というのは

空隙は闇の中に参考書やテスト対策の物を入れて、その都度見る

それでも分からない問題は、ネットにリアルタイムでアクセスして
答えを導くなどしたからです。

白咲は努力もしてなおかつ天才だからです。

第七話（前書き）

これでいいのかな・・・

第七話

ある日、空隙は街を歩いていたら学校帰りの上条当麻^{かみじょうしつま}に会ったので一緒に歩いていると、御坂が走ってきてこう当麻に言った。

「見つけたわよあんた！」

そこから上条と空隙は一緒に御坂からなぜか逃げた。

街中を走って逃げていると上条が路地に入ったので、空隙が後に続くと行き止まりだった。

そこに御坂が追いついてこう言った。

「もう逃がさないわよ」

「ちよつと待つてくれ俺は……」観念しなさい！」

上条がなにか言おうとしたが、御坂が有無を言わさず電撃を放ってきた。

その電撃に上条が右手をだすと、電撃が右手に触れたら打ち消された。

その後、御坂から逃げ切ると上条の部屋に行って、電撃を打ち消した事について空隙は聞いた。

「当麻、御坂の電撃をどうやって打ち消したんだ？」

「ん、ああそれは俺の右手は異能の力なら触れるだけで何でも打ち消す事が出来るからだ」

上条は空隙にとって信じられない事を言った。

「………当麻これを打ち消せる？」

空隙は握りこぶし位の闇の塊を作るとそう言った。

「ほら」

上条が右手で闇の塊に軽く触れると跡形もなく闇が消えた。

「………当麻はなんで無能力者（レベル0）の扱いなの？」

こんなありえない能力を持つ上条がなんで無能力者なのか空隙は不思議に思った。

「それは能力測定でこの力が反応しないからだよ」

上条が右手を見ながら言った。

「……………なるほど」

空隙は能力測定の仕方を思い出して納得した。

「（うーむ、自分が闇の状態で当麻の右手に触れたら、自分は死ぬ……いや完全に消えるな……自分を消せる能力が二つもあるとは……）当麻はすごいな」

空隙はそんな事を思いながら言った。

「え、そんなことないだろ。それを言えば空隙の方がすごいと思うぞ」

上条は意外という感じで答えた。

「いや……そんなことないよ……（自分と当麻が戦ったら条件にもよるけど、

多分当麻が勝つだろうな……そして多分、自分を本当に殺せるのは当麻と月乃だけだ）」

空隙はそう思いながら不思議な感覚を感じた。

「空隙？ どうしたんだ？」

上条が聞いてきた。

「いや、なんでもないよ……そろそろ夜も遅いしも帰るよ、色々教えてくれてありがとう」

空隙はそう言うのと立ち上がった。

「そうか、それじゃあな」

上条は手を振りながら答えた。

「うん、じゃあ」

空隙はそう答え家に帰った。

次の日、空隙は暗部の仕事で学園都市を後にした。

空隙がこれから行う暗部の仕事の内容とは、中東のある小国に逃げ込んだ元学園都市の科学者を追って殺す、というものだ。

その科学者が逃げ込んだ所はその小国の反政府ゲリラ組織で、そのゲリラも一緒に潰せ、との事らしい。

どうやらこの件にはその小国の政府も絡んでいるようで、その科学者は軍事関係の事をやっていたらしく、その科学者がゲリラに入ったら彼らに武器と金を渡したようで、ゲリラが積極的に攻勢にでているらしい。

そのゲリラの攻撃に悩んだ政府が科学者の事をつかんで、学園都市に秘密裏に言って、話し合った結果、その政府と学園都市でゲリラと科学者を一緒に皆殺しにしよう、という事情があるようだ。

そして今回の作戦がまず空隙がある程度分かっているゲリラの拠点とその構成員の割り出しと科学者の所在特定、その後はその情報に従いゲリラを壊滅させ、それと同時に科学者を殺す。

政府の軍はゲリラが逃げないように包囲網を引いて待機、空隙の本拠地襲撃と同時に各地にあるゲリラの拠点を襲撃するらしい。

今回の作戦にともない空隙はある程度、制限を受けた。例えば、能力の詳細をばれない様にしろとか、武器は政府軍のを使え、等があった。

まあそんなこんなで空隙は行動を開始した。

空隙は政府が用意したホテルに行き、先ほど取り込んだ人や鳥やネズミ等を放って情報収集にあたった。

二日たったある日、情報収集をしていたネズミがゲリラとおぼしき人物を発見したので、ネズミに追跡させながら空隙もその人間の元に向かった。

ゲリラとおぼしき人物を闇に取り込んで情報を引き出してみると、案の定ゲリラの一員だった。

空隙はそのゲリラから情報を引き出せるだけ引き出し、そしてゲリラの幹部をつきとめ、その幹部の元まで案内させ幹部とその周りにいたゲリラを取り込んだ。

そして幹部の男から拠点の情報と構成員と科学者の情報を引き出した。

空隙は取り込んだ幹部と他のゲリラに、本拠地に仲間を集める暗示と、爆薬（C-4）を体内に入れて、記憶を操作しそして一時的に自由にした。

空隙は政府に手に入れた情報を伝えた。

そして詳しい作戦日時等を決め、作戦時刻まで休む事にした。

どうやら夜やるらしい。

作戦が決行される少し前、空隙は取り込んだ人間の自由を奪い、人が集まっている所、

武器庫、指定室、そして科学者の所に行くようにした。

そして作戦開始とともに空隙は闇の状態となり、夜の闇に紛れて

ゲリラの拠点に潜入した。

空隙は科学者の元に行き、科学者を死体にして取り込んだ。それと同時に操っている人間に周りの人間を撃ち殺させた。

少ししたら撃ち返されてすぐ死体になったので、体内に入れてあるC - 4を少ししたら爆発させた。

武器庫の人間は交戦させず直ぐにC - 4を爆発させた。そうしたら閃光と爆音が聞こえた。

その後は一方的な殲滅（虐殺）に終わった。なにせいきなり奇襲を受けて、トップと幹部が死んで指揮系統がズタズタ、味方がいきなり襲ってくる、謎の黒い塊が表れて銃を撃ってきて、さらに攻撃が効かない、逃げだしても政府軍の包囲網で逃げ場は無いのだから。そして夜が明ける頃には作戦が終了していた。

そして空隙は学園都市に戻った。

第八話 七月二十四日

数日後、空隙が学園都市に戻ってきたら、白井から連絡が来て御坂を手助けしてほしいと言われた。

その際、幻想御手事件と木山がその事件の犯人という事を聞き、さらに初春が人質に取られているらしい、という事を聞いた。

空隙は白井から送られてきた情報から、木山なる人物の元までタクシーで移動を開始した。

移動の途中で白井から木山が能力開発を受けていないのに、能力を使用しさらにそれが幻の多重能力らしく、その能力を使い警備員と交戦しているという事を聞いた。

情報にあつた場所まで行くと胎児の様な不思議な生命体(?)と御坂がいた。

「御坂あれは何だ？」

空隙は御坂に駆け寄るとそう声をかけた。

「あんたやつと来たわね！ あれは幻想猛獣（AIMバースト）で名前で幻想御手を使った一万人の思念の塊らしいわ。そしてあいつを倒すには、幻想御手の治療プログラムで幻想御手のネットワークを破壊する必要があるの！ 治療プログラムは初春さんが警備員の車両を使ってながすわ！ でもあいつは原子力実験炉に向かっているから、私たちはそれまでの間、時間稼ぎよ！」

「（御坂はなんだかすごいものを、相手にしていたようだ。まあ、これから自分も相手をするのだが……）とりあえず状況は分かった。あの幻想猛獣の足止めをすればいいんだな」

「分かったんなら、行くわよ！」

そう言うつと御坂は電撃の槍を幻想猛獣に放った。

幻想猛獣は電撃の槍をくらって触手が壊れたが、すぐに元に戻った。空隙は闇を使い御坂のフロアをしながら応戦した。

幻想猛獣が頭上で緑色のエネルギーを溜めながら、氷の塊の様な物を撃ってきた。

御坂は地面から砂鉄を取り出すと、それで迎撃した。

幻想猛獣は何故か緑色のエネルギーを二人にではなく、別の方向に放った。

それが警備員達のいる所に着弾した。

「初春さんたちが！！」

御坂が叫んだ。

空隙は着弾した所を見ると、警備員の車両が大破していた。

「まずいな……御坂、自分は向こうに行く」

空隙はそう言うつと闇を地面から出し鞭状にして相手を縛り上げ固定し、走り出した。

「分かった！ そっちは頼んだわよ！」

「初春、治療プログラムは無事か？」

初春の所まで行くと、空隙は質問した。

「空隙さん！ はい治療プログラムは無事です、でも警備員の車両が壊れてしまって治療プログラムを流す事が出来ないんです！」

初春は空隙の予想道理の事を言った。

「それなら心配ない、自分が直す」

「どうやってですか！？ 警備員の車両は壊れたんですよ！？」

初春は治療プログラムと思いきチップを握りしめて言った。

「こうやって」

空隙は大破した警備員の車両と近くにある残骸とドラム缶型の口ポットを闇に取り込むと、車両の損傷した箇所を理解して闇の中で最適な修理を行って、闇から出した。

「えっ！？ そんな、直ってる！」

初春は目をまん丸にして驚いた。

「……初春、治療プログラムを」

「あっ、はい分かりました。でも警備員の人達がさっきの攻撃で気絶したようなので、風紀委員の私が治療プログラムを流せるかどうか……」

初春は遠くで倒れている警備員を見て言った。

「……………それなら多分大丈夫だ。初春、治療プログラムを流す用意をしてくれ」

「分かりました。」

そう言つと初春は警備員の車両に入り準備に取り掛かった。

「さて、こつちも始めるか……」

空隙も車両に入り腕を闇の状態にし、闇の中にあるスーパーコンピュータ三台を接続し、警備員の車両からハッキングをかけた。

「空隙さん、準備終わりました！」

「自分もこれで………終わりだ。初春、転送してくれ」

「はい！」

そうして治療プログラムが学園都市に流れた。

治療プログラムが最後まで流れたのを確認するとハッキングをやめ、御坂と幻想猛獣の方を見に車両から出た。

そうしたら、御坂のレールガンが幻想猛獣の核の様なものを撃ち貫いていた。

それにより、幻想猛獣が消滅した。

幻想猛獣消滅後、空隙は警備員に車両の事とハッキングの事について事情聴取を受ける事となった。

「まあ、今回は事情も事情だから何とか許してやるじゃん」

この黄泉川よみかわ 愛穂あいほという警備員はどうやら空隙の行為を許してくれるらしい。

「（でも、上の方は大丈夫なのか？ 普通は許してくれないと思うんだけど……）ありがとうございます」

空隙はそんな事を考えながらお礼を言った。

「いってことじゃん。もう遅いし気付けて帰るじゃん」

黄泉川さんはそう笑顔で言った。

「はい分かりました、それでは失礼します」

空隙はそう言って、帰り道についた。

白咲サイド

白咲は警備員から空隙が事情聴取を受けている、と連絡があった

ので夜の学園都市を歩いて空隙の元まで向かっていた。

「（しかし、一体なにをしたんでしょう？ 詳しい事は教えてくれませんでしたし……）」

白咲はただ、空隙が事情聴取を受けている、という事と場所しか教えてもらえなかった。

白咲は空隙が本当に事情聴取を受けているかどうか確かめる為に携帯で警備員と空隙に連絡をしたのだが、警備員は本当に事情聴取を受けていると答えが返ってきた、空隙は事情聴取の途中なのか繋がらなかった。

緊急用の連絡手段を使う事も考えたが、そこまでの事態ではないと思い使わなかった。

「（ん、これは……何か消していますね）」

白咲は自分のAIM拡散力場の消去状態からそう判断した。

「（しかし、これはいつもと違う感じがします、この消している物は一体？）」

白咲は疑問に思いながら歩き続けた。

「（あれは……上条さん）」

白咲が路地裏から大通りに出ると、上条が道路上に倒れていた。よく見ると体が傷付き血が出ている所もあった。

そしてその傍らに長い髪をポニーテールに括り、Ｔシャツに片方の裾を根元までぶった切ったジーンズ、腰にはウエスタンベルトそして2m以上の日本刀を持った女性がいた。

白咲は知らないがその女性は魔術の世界では有名な人で、かんざき神裂かおり火織という。

白咲が二人に近付行ったら、神裂が白咲の方に振り向いた。

「貴女は魔術師ではありませんね、何故人払いのルーンの中に……」

「人払いのルーン？ いえそれより上条さんに何をしました」

「……私達の邪魔をしたので倒しました」

「邪魔をした？……とにかく上条さんは病院に連れて行きます」

「それは出来ません、彼はインデックスが逃げないように足枷にするので」

白咲は自分の首につけてあるチョーカーを外してもう一度強い口調で言い放った。

「上条さんは私が連れて行きます」

白咲は隠し持っている、使い慣れた銀色に光るナイフを取り出すと一気に跳躍し、神裂に切りかかった。

「っ、魔術を使っていないのにこの威力!？」

神裂が刀でナイフを防ぐと魔術強化していないとは思えない衝撃が走った。

「（それにこの速度……普通の人間に出せるものではありませんね）」

白咲は神裂の刀のリーチが長い為、刀の長さが不利になる位近い距離で戦っていた。神裂もいったん離れようとしたが、白咲はそれを許さない。

「貴女は一体何者です、もしかして超能力者ですか」

「超能力者なのは合っていますが、この身体能力に私の能力は関係ありません」

「まさか何の力も使わずにその身体能力!？」

白咲一気に戦闘を終わらせるために、人間の急所に切りかかった。

それはある種、人間に出せる最大限の速さである。しかしそれ以上の速さで神裂は動き、先程からしているように手加減して白咲の鳩尾に一発拳を入れた。

「うっ、……何故」

神裂の答えを聞く前に白咲は意識を手放した。

空隙サイド

「（うーん、予想以上に遅くなったな、早く帰ろう。ん？　なんで

向こうに？」

普段から白咲に付けてある自分の闇が、家ではなく別の方向にあった。

「（なにかあったのか……、とにかく行くか）」

空隙は闇のある方に向かった。

「（あれは！）」

空隙が大通りに出ると、白咲と上条が道路上に倒れておりその近くに神裂がいた。

空隙は闇の中から、実弾が装弾済みの学園都市製のアサルトライフルを取り出すと、神裂に照準を合わせて引き金を引いた。

神裂は弾丸を全て視認し、全て刀で弾いた。

「誰です」

神裂は空隙に向かって銃で撃たれていたとは思えないくらい冷静な声で問い掛けた。

「空隙 磐生。そういう貴女は？」

空隙は時間をかせいで細工を完成させるために、神裂の問いに答えた。

「神裂 火織と申します」

「神裂さんですか……、ところで上条と白咲に危害を加えたのは貴女ですか？」

「そうです、私がやりました」

「やはりそうですか……、一応理由を聞いても？」

空隙は理由なんて聞く気もなかったが、白咲から注意をそらす為に聞いた。

神裂が何か言おうとしたら、白咲がアスファルトの地面に突然出来た黒色の穴に落ちて消えた。その穴は白咲を飲み込むと闇が溢れて集まり、元のアスファルトの地面に戻った。

空隙は自分の足元から出した闇を白咲の元まで地中を伝わせとどけ、土を取り込みその空間に小形の核シェルターを闇から取り出し、最後に地面に穴を空け白咲を核シェルターに入れたのだ。

「（ひとまず一定の安全は確保した、後は冥土返し（ヘブンキャンセラー）のいる病院に連れて行けばいいが……、どうするか……）」

「彼女なら連れて行ってもいいですよ、気を失っているだけですから、じきに目が覚めます」

神裂はあっさりそう言った。

「神裂、いいのか？」

物陰から身長2m以上の長身で肩まである赤い長髪、右目の下にバーコードの刺青があり、神父の格好をしていて煙草を吸っている男が出て来て神裂にそう言った。

彼の名はステイル・マグヌス、神裂の仲間である。

「構わないでしょう、私達の目的はインデックスの記憶の消去です、今は他の事に構っている余裕はありません」

「まあ、それもそうだな」

「（この二人、目的は自分と月乃じゃないみたいだな……、なら今は戦闘は避けて早く病院に行くべきだな）」

空隙は、白咲を入れた小型の核シェルターが十分に離れた位置に行ったのを確認すると、自分もその場を後にした。

第八話 七月二十四日（後書き）

ここで作者からお知らせがあります。作者はこれから学生が阿鼻叫喚の地獄になるテスト週間に入ります、なので今より更に投稿が遅くなってしまうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4907p/>

とある二人の混沌掌握

2011年10月7日20時39分発行